

## 九州和牛に関する研究

## 第1報 九州の和牛に関する統計的概観(予報)

川 関 巖・沢辺恵外雄・武田 功

九州農業試験場

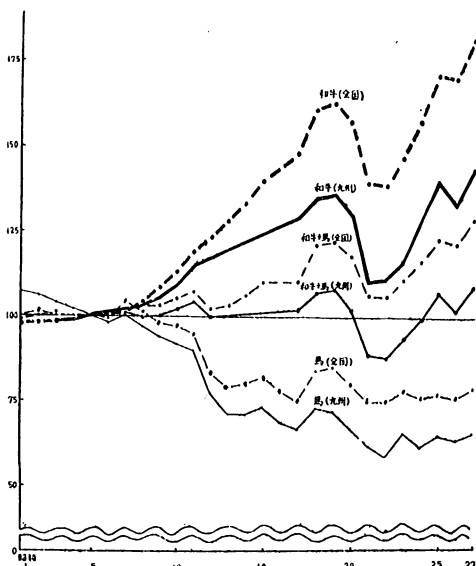
KAWASEKI, I., SAWABE, E. &amp; TAKEDA, I. Studies on the Native Cattle in Kyusyu

1. Statistical Observation on the Native Cattle in Kyusyu  
(Preliminary Report)

九州においては、家畜の中で最も主なものは和牛であるが、今日までの処、その計数的把握に極めて乏しく、又経営的研究に関する資料、文献は殆んど皆無の状態である。処で和牛は役利用、自給肥料の生産、糞生産、育成又は肥育等種々の利用面において、今後の有畜農業進展に果すべき役割は甚だ重大であると思われる。それ故に、これらの「和牛と農業経営との関連に関する諸研究」の出発点として、九州の和牛について、時間的、地域的に、主として統計的に取扱つたのが本報告である。出来るだけ正確な数字をもとめ、能う限りの統計資料を渉猟して得たものであるが、ここにその概要を予報として報告する。

1. 最近の和牛の増加傾向は、その中に大きな2の現象を含んでいる。その1は牛馬の位置転換であり、

第1図 全国及び九州区における和牛・馬・和牛・馬の飼養頭数の変遷(夫々昭和5年を100とした指数で表わす)



その2は和牛飼養立地の移動である。

1) 牛馬の位置転換は、第1図に見る通り、九州区では特に顕著であるが、馬の減は全国よりも著しく、和牛の増は全国に及ばず、従つて和牛と馬の計において、全国は漸増傾向を示すが、九州区は停滞気味である。この転換現象を、九州区内で更に細かく観察すれば、県、郡、町村の各段階において、場所によつてさまざまな強さで現れている様である。

2) 和牛の飼養立地の移動は、全国的には西から東へ、即ち九州、中国区から東北、北陸、関東、東山、東海区への移動傾向を示し、九州区内では山から平地へ、即ち生産基盤を主として牧野に依存する地域から耕地に依存する地域への移動傾向を示している。

(第2表及び第2図参照)

2. 九州の和牛は、中国の和牛と共に、歴的に全国首位にあるが、中国区では馬は甚だ少いのに対して、九州区では和牛と馬が共に著しく多いのは、全国に類例のない注目すべき現象である。従つて九州の和牛の農業経営内部における地位、役割は、中国の和牛のそれとかなり趣を異にしているであろうと予想される。この和牛と馬の併存現象は、宮崎、熊本両県に特に顕著である。

3. 今後の研究展開のための準備作業として、九州各县について概して昭和25年現在において、和牛飼養の概況を種々の角度から考察すると共に、郡段階において大抵に飼養型態の地域性の把握を試みた。

元来和牛は種々の用途を兼ねる性質が強いものであつて、我が国の様に農業経営が更に零細化の方向に進みつつある状況下においては、特に混合型態或は未分化の形で飼養される場合が、次第に多くなる傾向が窺える様である。従つて飼養型態の地域性の把握は、極めて困難であるし、又さまざまな考え方、方法があると思われるが、筆者等は試みに、第1表に示す様な方

法を採つてみた。

1) 先づ第1表(1)の通り、生産率、成牝率、飼養

第1表 作業参考表

(1)

指標	階層区分		
	平均以上	平均以上	九州区平均
生産率	甲	乙	31.9%
成牝率	甲'	乙'	52.3
飼養農家率	甲''	乙''	42.7

(2) 3指標・2階層による組合せ 8種

- 甲3ヶ.....甲甲'甲''
- 甲2ヶ.....甲甲'乙'' 甲乙'甲'' 乙甲'甲''
- 甲1ヶ.....甲乙'乙'' 乙甲'乙'' 乙乙'甲''
- 甲0ヶ.....乙乙'乙''

(3) 生産率の高低によりA, B 2群に分ける

A. 生産の盛んなグループ 49郡市	甲甲'甲''.....18郡市
	甲甲'乙''.....15
	甲乙'甲''.....5
	甲乙'乙''.....11
B. 生産の盛んでないグループ 65郡市	乙甲'甲''.....18
	乙甲'乙''.....4
	乙乙'甲''.....14
	乙乙'乙''.....29

(註) 生産率 =  $\frac{\text{年間生産頭数}}{\text{成牝頭数}}$  成牝率 =  $\frac{2\text{才以上牝頭数}}{\text{総頭数}}$

飼養農家率 =  $\frac{\text{飼養農家数}}{\text{総農家数}}$

農家率の3指標を採り、各指標について九州区平均を基準として、平均以上と平均以下との2階層に分けた。この3指標、2階層による全組合せは、同表(2)に示す8通りとなる。これを(3)に示す様に、生産率の高低により、

A. 生産の盛んなグループ

B. 生産の盛んでないグループに2大別した。

次にこれを第2表に示す通り、飼養型態により7細別した。

先づA. グループについて、飼養規模の特に大きなもの8郡、即ち1戸当2頭以上飼養するもの4郡及び1.5~2頭飼養するもの4郡を一甲甲'甲''のグループより7郡、甲甲'乙''のグループより1郡一抽出した。この8郡は飼養及び生産の規模、密度共に特に大であり、又牧野面積も著しく広く、牧野依存による生産主型態と考えられる。次に甲甲'甲''18郡市中の残り11郡市は、飼養規模が前記8郡より小で、九州区平均よりやや大程度であり、又牧野面積も前者に劣る処から、主として耕地依存による生産主型態と考えてよから

第2表 九州和牛の飼養型態の地域性

飼養型態別	郡市数	生産頭数	
		飼養頭数	%
A. { 生産主型態 (牧野依存 耕地依存(a))	8	18.5	26.0
	11	19.4	29.5
	30	25.3	28.6
B. { 育成主型態 肥育主型態 使役主型態 和牛稀薄型態	14	36.8	15.9
	9		
	31		
	11		
計	114	100	100
耕地依存型態 (a) + (b)	41	44.7	58.1

(註) 和牛稀薄型態のものは、混合型態30郡市中に7郡市、育成主型態14郡市にも3郡市含まれ、総数21郡市である。

	九州区平中	全国平均
飼養農家 1戸当頭数	1.25頭	1.13
農家 1戸当頭数	0.53	0.36
耕地 1町当頭数	0.80	0.44

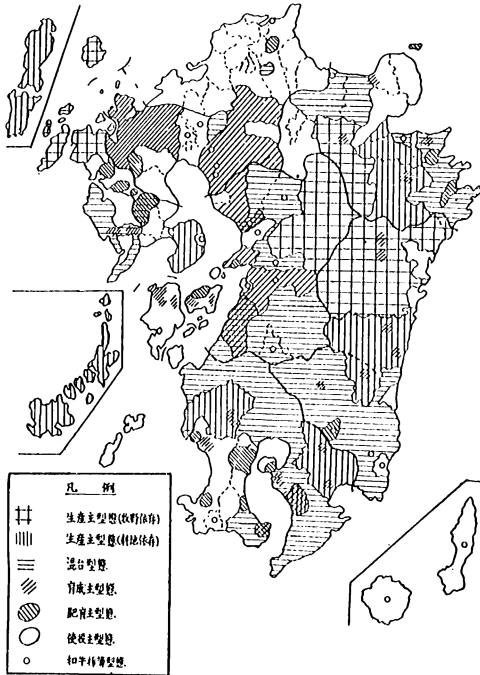
う。甲甲'乙''15郡市中の残り14郡市と甲乙'甲''5郡市及び甲乙'乙''11郡市の計30郡市は、成牝率がやや低いか、或は飼養農家率がやや低いからであり、混合型態の生産を行うもの、即ち和牛と共に馬の生産も盛んであるか、或は和牛の生産と共に育成又は肥育も盛んであるものと推測される。

次にB. グループについては、先づ各県畜産課に依頼した「著明な育成地又は肥育地に関する調査」資料により、育成主型態のもの15郡市、肥育主型態のもの9郡市を抽出した。更に農家1戸当頭数及び耕地1町当頭数共に全国平均より小のもの14郡市は、和牛稀薄型態として除外し、残り27郡市を使役主型態と考えた。(和牛稀薄型態と考えられるものは、前記A. グループの混合型態30郡市中にも7郡市含まれている。)

以上第2表に示す区分を図示すれば、第2図の通りである。

ここで各飼養型態別の飼養頭数及び生産頭数の、九州区総数に対する割合を見れば、第2表の通りである。生産の盛んな郡市について観察すれば、生産基礎を主として牧野に依存すると思われるもの8郡市が、夫々18.5%、26.0%を示すに対して、主として耕地に依存すると思われるもの41郡市は、夫々44.7%、58.1%を示し、和牛の飼養立地の牧野依存から耕地依存への移動傾向を窺える様である。

第2図 和牛飼養型態の地域的分布  
(昭和26年現在)



2) 同様の方法によつて、各県別の和牛飼養の概況を表示すれば、第3表の如くなる。

即ち大分以下鹿児島に至る5県は、何れも和牛の生産県と云うべきであろう。就中大分は6指標すべて平均以上を示し、最も典型的な生産県であり、長崎は成牝率だけが平均以下を示している。宮崎、熊本の飼養密度を表わす3指標が平均以下を示すのは、馬飼養の多いためであろう。鹿児島は飼養、生産共に全国首位にあるにも拘らず、4指標が平均以下となつているが耕地1町当頭数を見れば平均以上であり、零細農が特に多いことを示すものと思われる。佐賀、福岡は和牛の使役、消費県であるが、佐賀の成牝率のやや高いのは、近來の生産の増加を窺わせるものであろう。

第3表 和牛飼養の縣別概況

指標別		生産率	成牝率	飼養家率	飼養農家1戸当頭数	農家1戸当頭数	耕地1町当頭数	各指標の階層表示						
大分	分	44.4%	61.4%	45.8%	1.36頭	0.62頭	1.06頭	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
長崎	崎	41.6	51.3	53.6	1.25	0.57	1.13	甲	乙	甲	甲	甲	甲	甲
宮崎	崎	40.3	54.4	40.9	1.35	0.55	0.74	甲	甲	乙	甲	甲	甲	乙
熊本	本	39.9	57.3	35.5	1.41	0.50	0.64	甲	甲	乙	甲	乙	乙	甲
鹿児島	島	46.1	48.5	42.6	1.21	0.51	0.93	甲	乙	乙	乙	乙	乙	甲
佐賀	賀	25.5	53.1	40.8	1.14	0.47	0.60	乙	甲	乙	乙	乙	乙	乙
福岡	岡	7.2	42.0	41.7	1.06	0.44	0.62	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
九州	区	37.8	52.3	42.7	1.25	0.53	0.80							

(注) 階層表示は九州区平均以上を甲とし、平均以下を乙とする。